

楽曲や発言から読み解く キング・オブ・ポップの哲学

吉岡正晴 (音楽評論家)

マイケル・ジャクソンは自身のパフォーマンスや人生、そして世界情勢についてどのようなことを考えていたのか。彼自身の言葉と楽曲から、その本音と思想に迫る。



2002年のMTVビデオ・ミュージック・アワードでスピーチするマイケル・ジャクソン。ニューヨーク市のラジオシティ・ミュージックホールにて。写真=Getty Images

最後の雑誌インタビュー

稀代のアーティストとなったマイケル・ジャクソンはあるときから一切のインタビューを受けなくなった。

1979年8月にエピック・レコードからの初のソロ・アルバム『オフ・ザ・ウォール』(クインシー・ジョーンズ・プロデュース)を発売し、未曾有の成功を収めて以降、いわゆる紙媒体のインタビューを極力さけるようになり、雑誌インタビューとしては、1982年8月20日、ロサンゼルス・エンシノにあるマイケルの自宅近くで行われた、ニューヨークのアーティスト、アンディ・ウォーホルによる『インタビュー』誌のものが事実上最後のものとされている。

ちょうどエンシノの自宅がリフォームのためマイケルは一時的に別宅に居住しており、そこでインタビューが行われた。マイケルが映画『E.T.』に感動し、そのサウンドトラックに参加、それがまもなく発売されるであろう時期だった。その後、世紀のベストセラーとなる『スリラー』の制作が進んでいる時期でもある。ボブ・コラチェロが聞き手となり、途中からアンディ・ウォーホルが電話で参加したこのとき

のインタビューは、マイケルが表紙を飾った『インタビュー』誌の1982年10月号に掲載された。

なぜマイケルは紙媒体のインタビューを受けなくなったのか、一度、マイケルの妹ジャネット・ジャクソンに尋ねたことがある。ジャネットによれば、「メディアには自分が言ったことと真逆のことが書かれたり、本当におもしろおかしく事実を歪曲して書かれることが多くなったので、そうしたインタビューがすっかり嫌になっていったから」と答えた。

確かに『オフ・ザ・ウォール』がそれまでのブラック、R&B、ソウル・ミュージックのアーティストの中では群を抜いたセールスを記録し、その人気ぶりが幅広くポップの世界に浸透するにつれ、メディアのゴシップ、ときには茶化すような記事が激増した。言ってもいないことが、あたかも言ったかのように書かれたり、言ったことが正しく報道されなければ、それは

嫌気もさすだろう。なお、日本では比較的行われている取材対象者による原稿の事前チェックはアメリカのメディアではまずない。メディア側がしっかりと編集権を保持しているためだ。結局、マイケルはその後、原則として編集・改ざんなどされる可能性がきわめて低い、テレビの生放送によるインタビューのみ応えるようになった。それ以外でマイケルの声や主張、コメントなどが聞かれるのは、なんらかの記者会見のときの質疑応答くらいになった。

しかし、この時期以前からもある程度そうだったのだが、マイケルの心の底から湧き出てくる主張、意見、コメントが、以降はより、彼が作り出す「歌」「楽曲」の「歌詞」そのものに込められているように思える。マイケル・ジャクソンが何を考え、世界情勢に対してどのような意見を持ち、自身の哲学に照らし合わせて、どういう歌を歌っているか。それを知ればある程度マイケルの考え、人となりがつかめるわけ

だ。一方で、マイケルはその派手な動きや、華麗なダンスによる「ヴィジュアルのイメージ」が圧倒的なために、そうした主義主張の強さが薄められてしまう側面がある。

これからマイケルの発言をテーマごとに見ていくわけだが、より彼の真髓に近づくためにも楽曲に込められたメッセージも読み取っていきましょう。

壁から飛び出しなよ

レンガの壁(wall)の前に立っているタキシード姿のマイケルが印象的な同名アルバムのタイトル曲「オフ・ザ・ウォール」。直接的な意味は、「壁から飛び出して」といったニュアンスだ。それまでシャイで、知らない人となかなか打ち解けられなかったマイケルが、パーティなどで壁に寄りかかってなかなか他の人と和めない場面で、「壁から飛び出しなよ」という意味をもつ。

「壁から飛び出す」「既成概念を打ち破る」「はじける」という、シャイな彼にとっては前向きなアクションを誘う賛歌でもあった。

この曲自体はマイケルを想定して、イギリスのヒートウェイヴのメンバーでプロデューサー

決まったタイプの音楽ばかりやっていくたくない。
自分にレッテルを貼られるのもイヤだ